2017年2月19日　中原キリスト教会礼拝メッセージ

　　　　　　　　　　　　　**「イスラエルの十二部族」**

聖書箇所：創世記　29:31-30:8

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　今日の聖書箇所はヤコブの子供たち、即ち、イスラエルの十二部族の由来に関する話です。お読みいただきました聖書の箇所は、この十二部族の祖先が生まれる箇所の最初の部分です。29:31-30:24までが該当箇所ですが、その最初の方をお読みいただきました。ここに到るまでの話を簡単にしておきます。イスラエルのそもそもの祖先はアブラハムですが、その子イサクにはエサウとヤコブという二人の息子がいました。エサウが兄です。母はリべカです。リべカは兄のエサウより弟のヤコブの方を愛しました。そして弟のヤコブに計略を授け、イサクをだまし、エサウの長子の特権を奪ってしまいます。母リべカはエサウの復讐を恐れ、ヤコブを自分の兄ラバンの所に避難させます。そしてラバンの下で牧畜の手伝いをすることになります。ラバンには2人の娘が居ました。レアとラケルです。ヤコブは妹のラケルを愛したので、ラケルを妻にするため7年間ラバンの下で働くことになります。7年の奉公期間を終えたのでヤコブはラバンに約束通りラケルを妻に下さいと言います。ここでラバンはヤコブが、ラケルの代わりに姉のレアの所に入り、寝るように仕向けます。ラバンは「われわれのところでは、長女より先に下の娘をとつがせるようなことはしないのです」とうそぶきます。そしてラケルをも妻としてほしいのであれば更に7年間ラバンの下で働くことを条件とされます。ヤコブはこれに従うこととしてラケルのところにも入りました。なお、イスラエルというのはヤコブの別名です。

そこで、本日の箇所に入ります。29:31です。「主はレアがきらわれているのをご覧になって、彼女の胎を開かれた。しかしラケルは不妊の女であった」とあります。レアがヤコブに嫌われた代わりに神はレアに子供を与えたように表現されています。そして、何とヤコブに愛されているラケルは子供が生まれない体だったと言われています。ここで「レアが嫌われる」という意味で使われている「sa:ne:」は「敵」と言う意味もあるほどの嫌うと言う言葉であり「嫌悪する」というくらい強い言葉です。どういう理由でこれほどレアがヤコブに嫌われたのか解りません。しかし、そのような女に子供が与えられたのです。しかも十二人中六人の子どもがレアの子なのです。最初の子はルベンです。この名前は「子を見よ」という意味です。レアが誇らしげに「この子を見よ」と皆に見せたのかもしれません。「ra:a:」（見る）と「ben」（息子）の合成語です。そして、レアはこれでヤコブは自分を愛するようになるだろう、とつぶやきます。しかし、そうはなりませんでした。

次にレアはシメオンを生みます。この名前は「sha:ma:」（聞く）という言葉から派生した言葉です。レアのつぶやきに「主が、私が嫌われているのを聞かれて」とありますが、この「聞かれて」が「sha:ma:」です。あのイスラエルは必ず祈らなければならない祈りの言葉である「shema:」と同じ言葉です。神について使われる言葉ですから極めて重大なことを表現しています。「聞く」は単に耳で聞くということではなく「聞き届ける」の意味です。

そして次に三人目の子がレビです。この名前は「結びつける」という意味の「la:va:」からきています。レアのつぶやきの「夫は私に結びつく」の願いを込めた名前ということでしょう。ヤコブがレアを嫌う、というのも少しは和らいできたのかもしれません。

そして4番目の子を産みます。ユダと名付けられます。この名前は「ya:da:」（ほめたたえる）から派生した言葉です。これは「神をほめたたえる」に使われる「賛美」の言葉であり聖書では重要語の一つです。二人目までは夫ヤコブに好かれたい、という一心であったのですが、三番目の子のところでその希望はかなえられたのか、またはレアはそのような人間的愛を追い求める態度を止めたのかのいずれかです。おそらく、後者だったのではないか、と想像します。好き嫌いの次元を超えた夫婦の関係になって行った、と言うべきかもしれません。4人目のところでは「主への讃美」の言葉を述べています。

これら4人の子供が生まれた時のレアのつぶやきをみると3番目のレビの時以外はイスラエルの神「主」が恵みを与えてくれた、という意味合いになっています。三番目のレビの場合も、文章の流れ、からして「主」という主語が隠れている、と言って良いと思います。ヤコブに愛されたい、という極めて人間臭い願望が背後にあるにしても子供を「神の恵み」として受け取る信仰的態度は見られます。そしてレアは子を産まなくなったと言われていますが、後に再び子を産むようになります。

ここにあげられている4人の息子がイスラエルの12部族のうち4部族の祖先になるのですが、どのような民として聖書では扱われているのか述べておきます。まず長子ルベンです。創世記35:22に「ルベンは父のそばめビルハのところに行って、これと寝た」と記されており、第一歴代誌5:1には「イスラエルの長子ルベンの子孫－－彼は長子であったが、父の寝床を汚したことにより、その長子の権利はイスラエルの子ヨセフの子に与えられた」とあります。長子ルベンは父のそばめと関係を持ったため長子の特権を奪われ、ヤコブの長子はのちに生まれるヨセフの系譜とされた、というのです。

2男のシメオンはどうでしょう。創世記49:5-7では「シメオンとレビとは兄弟、 彼らの剣は暴虐の道具。---のろわれよ。---私は彼らをヤコブの中で分け、 イスラエルの中に散らそう」と言われており、旧約聖書ではシメオンは良く言われていません。しかし、ルカ福音書2章で幼子イエスを腕に抱き、神をほめたたえた人物の名はシメオンです。このシメオンは祭司のようですのでレビ族とシメオン族は一体化していって、祭司を出す部族となっていったのではないか、と想像されます。レビ族と一体化していくことにより信仰的に評価高い部族になって行った、と言えるでしょう。

3番目の息子レビは祭司職を継承する部族です。ヨシュア記におけるカナンの土地の分配においてレビ族は土地を与えられず、各部族の土地の中にレビ族の町が決められました。レビ族はモーセとアロンを生んだ血筋です。このモーセの兄アロンがイスラエルの最初の祭司です。そしてイスラエルの最初の預言者と言えるサムエルもこの系譜です。ダビデ時代の祭司ツァドクもレビ族です。この祭司の系列が新約時代の大祭司にもつながっています。イスラエル民族にとっては最も重要な部族の一つです。

4番目のユダは南王国ユダの中心となった部族です。ユダヤというのはペルシャにおける行政区としての「ユダの州」のことで、ユダとユダヤは同一の意味で使われます。イスラエルの正統はこのユダ族によって継承されていったというのが旧約聖書の一貫した見方です。ユダ族からダビデが出ており、主イエスもダビデの裔として考えられています。即ち南王国ユダ王国の系譜にある、ということです。その意味で、ユダ族というのも聖書の中では最も重要な部族の一つになります。

このように、レアの子供の中に既にイスラエルから旧約、新約を通して最も重要な2つの部族、レビ族とユダ族が生まれています。ヤコブの嫌ったレアによって生まれているのです。ここでちょっと子供の生まれない女性のことを考えてみましょう。聖書は子を産めない女性に対し、女ではない、人ではない、というような扱いをしている箇所も多くありますが、子供が生まれない女性に対し奇跡的恩寵により子を生むことができた、という話も多数あります。アブラハムの妻サラの話、バプテスマのヨハネの母エリサベツもそうです。更には新約では子供がいないと思われる女性が多数登場し、主イエスの事実上の弟子としてつき従っています。主イエスも愛を注いでいます。どこの国でも昔から子の生まれない夫婦の話はあり、日本では妾は子を産むため、という面もあります。「子を産みたい」、「子を得たい」という願望は昔から、どこでもあったようです。しかし、それがかなわない場合も多くあったことも事実です。以前にどこかで読んだ話ですが、アメリカ東海岸にある修道院の修道女が世話をしている孤児を十人くらい連れてカリフォルニアに向かうという話です。もらい子してくれる人を探すためです。その修道女は、孤児たちを段に乗せて村人に子供をもらって育ててください、と呼びかけるのです。そして順調に里屋が見つかって行くのですが一人の孤児だけは最後まで引き取り手がありません。理由は書いてあったと思いますが覚えていません。とうとう、東海岸に帰らねばならない時が来て、泣いている子供を連れて修道女は修道院に帰って行く、という話です。アメリカはもらい子することに割合オープンですが、日本ではこうはいきません。血の繋がった子供に執着する度合いが強いように思います。

聖書に戻ります。レアはこのようにして4人の子供を得るのですが収まらないのはヤコブに愛されている妻ラケルの方です。ラケルは恨み、つらみをヤコブにぶつけます。30:1-2です。「ラケルは自分がヤコブに子を産んでいないのを見て、姉を嫉妬し、ヤコブに言った。「私に子どもを下さい。でなければ、私は死んでしまいます。」/ヤコブはラケルに怒りを燃やして言った。「私が神に代わることができようか。おまえの胎内に子を宿らせないのは神なのだ。」と記されています。このヤコブの態度についてはいろんな考えがあると思います。しかし、このヤコブの言い方や当時の、子を産めない女性に対する考え方を考慮すると、ヤコブがラケルを愛していたというのもあやしいものだと思われます。美人だったので結婚前は好きだった、というに過ぎないのかもしれません。そこで、ラケルは自分のはしためビルハをヤコブの妾として差し出します。そのビルハが生んだのがダンとナフタリです。

ダンが生まれた時ラケルは「神が私をかばってくださった」とつぶやきます。ここは「正しく裁いた」となっている写本もあります。ダンと言う名前は、「di:n」（裁く）から派生した言葉です。ダン族からは士師記に登場し怪力で有名なサムソンが出ています。しかし、ダン族は偶像を持ち込んだという事から聖書記者から批判的に見られています。士師記18:30-31には「さて、ダン族は自分たちのために彫像を立てた。---こうして、神の宮がシロにあった間中、彼らはミカの造った彫像を自分たちのために立てた」とあります。新約聖書の黙示録7:4-8にはイスラエル十二部族の部族名が挙げられていますがそこにはこの「ダン族」はありません。新約時代の偽典のなかに「十二族長の遺訓」というのがありますがその中のダンについての記述にはダンはレビ、ユダに立ち向かい、「終わりの日々に主を離れる」と言われています。ダンの主はサタンである、とまで言われています。従って新約では死滅した部族として扱われています。

ビルハの子供のもう一人はナフタリです。ナフタリは「fa:tal」（争う）の派生語です。ラケルのつぶやきは“これで姉との争いに勝った”と言うのですが、強がりです。この部族からは士師記のなかに軍事的指導者バラクと女預言者デボラが出ています。彼等はカナンの王ヤビンを破ってイスラエルの勝利を得ました。士師記5章にあるデボラの歌は旧約聖書の中でも最も古い伝承に属するものではないか、と言われています。また今でも欧米圏ではデボラと言う名の女性が沢山います。しかし、北王国がアッシリアに滅ぼされたのち、住民は捉え移された、という記事もあり、聖書の中では消滅した部族です。このビルハの子の2部族はいずれもイスラエルの長い歴史の中では消滅していった部族です。

ラケルはそばめによって二子を得るのですが、子を産まなくなったレアも自分の側めであるジルバをヤコブの妾に差し出すことによって子を得ようとします。女の戦いがまだ続いています。ジルバが産んだ子はまずはガドです。この名前は「ga:d」（幸運）という言葉から来ています。二番目の子は「アシェル」です。これは「a:shar」（幸せと呼ぶ）の派生語です。これら二人の子が生まれた時のレアのつぶやきは「幸運が来た」「なんとしあわせなこと」という言葉であり、ここではラケルとの子供獲得競争の雰囲気はありません。完全に優越感に浸っているという見方もできるかもしれませんが、もっと素直に「神への感謝」と理解してもよいでしょう。ヨシュアがカナンの地に侵入する時ヨルダン川の東側に残った3部族があります。その部族の一つがジルバの第一子ガドです。ヨシュア記1:14では「あなたがたの妻子と家畜とは、モーセがあなたがたに与えたヨルダン川のこちら側の地に、とどまらなければならない。しかし、あなたがたのうちの勇士は、みな編隊を組んで、あなたがたの同族よりも先に渡って、彼らを助けなければならない」と言われていることから考え勇敢な部族と考えられていたようです。しかし、この部族からは、目だった士師は出て居ません。「十二族長の遺訓」の中ではガドの遺訓として6:1に「さあ、子供たちよ、お前たちにすすめる。隣人同士愛し合い、心から憎しみを退けよ」という言葉があります。新約聖書でイエス様のおっしゃられた御言葉に類似した言葉がガドの遺訓には多数あります。しかし、ガド族はあまり注目された部族ではありません。

アシェルはモーセによって祝福された部族です。申命記33:24では「アシェルは子らの中で、 最も祝福されている。 その兄弟たちに愛され、 その足を、油の中に浸すようになれ」と言われていますが、それほど目立った動きはありません。与えられた土地はフェニキアに接した地域です。新約聖書ではアセルと呼ばれていますが、ルカ2章に「エルサレムの贖いを待ち望んでいるすべての人々」に主イエスのことを語る女預言者アンナが登場しますがこの預言者がアセル族と言われています。いずれにしてもこのそばめ達の子供については、聖書はあまり注目しておりません。しかし一点注意すべき点があります。日本の歴史的伝統ではそばめの子供は本妻であるレアやラケルの子供にされるのは当然であり、そばめの名前は出てこないのですが、聖書はそばめをちゃんと、母として扱っています。創世記35:25-26では「ラケルの女奴隷ビルハの子はダンとナフタリ。/レアの女奴隷ジルパの子はガドとアシェル」と呼ばれており、側めの子であることを明確にしています。側めも一人の女性・母として扱われているのです。第一列王記7:13には「ナフタリの子は、ヤハツィエル、グニ、エツェル、シャルム。これらはビルハの子であった」と記され、ここではラケルのそばめ、とも言われていません。このように、そばめ、女奴隷、はては遊女などをも一人の女性として取り扱う聖書の伝統は注目に値します。この伝統は新約聖書においても随所に見られ、パウロの書簡でもキリスト教教会で女性が活躍しているのがうかがわれます。現在のイスラエルにおけるユダヤ人の定義は基本的には「母親がユダヤ人であること」が要件になっています。ユダヤ民族の民族性即ち「主なる神への信仰」の継承における母親の役割を極めて高く評価していることがわかります。この意味ではユダヤ民族は女系家族と言っても良いでしょう。

ヤコブの子供の話は更に続きます。14-16節に「恋なすび」事件が書かれています。長子のルベンが媚薬となる恋むすびを見つけてきて母レアにわたしたところ、それを聞きつけたラケルが欲しがったのです。これをヤコブに飲ませればラケルは子を産めるかもしれない、と思ったのでしょう。ラケルは恋なすびをもらう代わりに、レアがヤコブと寝ても良い、と言います。レアはもう子供は生まれないと解っての皮肉でしょう。

しかし、なんと「神はレアの願いを聞かれたので、彼女はみごもって、ヤコブに五番目の男の子を産んだ」とあります。そしてイッサカルと名付けます。これは「報酬を与える」という意味の「sa:kar」の派生語です。レアのつぶやき「私が、女奴隷を夫に与えたので、神は私に報酬を下さった」に由来しています。イッサカルからは士師トラが出ます。エフライムの山地シャミルに住んだ、と記されています。そもそも、イッサカルに分け与えられた地はエフライムよりずっと北のガリラヤ湖近辺でしたから、その後、部族の移動があり、エフライムとイッサカルは同一化していったと思われます。

更にレアの六番目の子として「ゼブルン」を生みます。これは、「za:bar」（尊ぶ）の派生語です。この名前はレアのつぶやき「今度こそ夫は私を尊ぶだろう」から来ています。まだ夫ヤコブの歓心を獲得しようと言う女性の意地のようなものが残っていました。また、ゼブルンはイブザン、エロンという2人の士師を出していますが、それほど目立った働きは記されていません。しかし、ダビデの時代には大きな軍事的、経済的貢献をしたようです。アッシリアによって他の地に捉え移されたようです。新約ではこの名は特別出てきませんが、イエス様の育ったナザレの地は、もともとはゼブルンの嗣業の地でした。ガリラヤ地方の一部です。

このあと21節にディナという女の子が生まれたことが記されています。これは、創世記34章にヒビ人ハモルの子シェケムがディナを辱しめたということで、シメオンとレビが復讐する記事があるため、特別に女の子をここで記したのだろう、と考えられます。

最後にラケルが子供を産むことになったことが書かれています。恋なすびのことは書かれていませんが、なにか役にたったのかもしれません。22-24節で「神はラケルを覚えておられた。神は彼女の願いを聞き入れて、その胎を開かれた。/彼女はみごもって男の子を産んだ。そして「神は私の汚名を取り去ってくださった」と言って、/その子をヨセフと名づけ」た、とあります。これは神のなされた奇跡です。ヨセフと言う名は「ya:saf」（加える）の派生語です。これは30:24でラケルが「主がもう一人の子を私に加えてくださるように」と祈った言葉からきています。

実は後に、ラケルは「もう一人」子を産むのです。「もう一人」はベニヤミンです。創世記35:16-19に書かれています。ベニヤミンの語源は「右手の子」即ち「後継者」「名誉な者」の意味です。この子はヤコブの旅の途中ラケルが産気づいて産んだ子ですがラケルはこのお産で死んでしまいます。聖書はこの時、ラケルが「ベン・オニ」と言ったと記しています。「私の苦しみの子」という意味です。ベニヤミンはイスラエルの初代の王サウルを生んだ家系です。エステル記に登場するエステルもベニヤミン族です。新約聖書ではもっとも有名なのはパウロです。ベニヤミンは与えられた土地がユダ族のすぐ北にあったということもあり、ユダ族と共に南ユダ王国を形成した部族です。

ヨセフについて言うと、ラケルのつぶやきは「神は私の汚名を取り去ってくださった」と言うものでした。ラケルは「子が産まれない」という年来の屈辱から救われた、という訳です。このヨセフは創世記の最後を飾る記事がヨセフ物語であり、エジプトで大臣にまでなり、イスラエルの一族が飢饉のためエジプトに逃げてきた際、再会し、彼らの面倒を見る、という物語となっています。そしてずっと後になって出エジプトの大遠征が起きると言う訳です。その子のマナセ、エフライムは北イスラエルの中心的部族になって行きます。マナセ族はヨルダン川の東と西に2個所土地が与えられ、それぞれ半マナセと言っています。士師の時代ではギデオン、ヤイル、エフタの3名の士師をだしており、なかでもギデオンは有名です。ギデオンはミデアン人即ち南方のアラブ人を打ち破った英雄です。やはりマナセ族のエフタはアモン人をやっつけました。南王国の王にマナセという王がいます。マナセ族という訳ではありませんがこの有力な部族の名を冠したのだ、と思われます。

エフライムに与えられた地はパレスチナでも最も豊かな地ともいわれています。この地にシロ、べテルという宗教都市があります。また、北王国の首都シェケムとも隣り合わせです。エフライムの系譜の人物としてはまずモーセの弟子ヨシュアがそうです。また北王国初代の王ヤラベアムI世がエフライムの出身とされています。そしてこのエフライムは北王国の代名詞にもなっていきます。新約時代におけるサマリヤが中心的町です。

以上がイスラエルの部族です。当初の十二部族というのはルベンに始まってヨセフを一部族とし、ベニヤミンまでの十二部族です。この十二という数字は一年間の月数でもあり、太陽暦と密接に関連した数字です。天の黄道も十二に分けられています。ローマ数字は十二進法です。エジプトに由来する数字かもしれません。創世記の29-30章にヤコブの子は上げられているのですが、ベニヤミンだけは35章に出てきます。レビ族というのは割り当てられた土地がない祭司部族であることから特別な部族ですから、これをはずし、その代わり、ヨセフの子のマナセ、エフライムを加え十二部族という言い方をすることもあります。また、レビ族は入れてラケルのそばめビルハの第一子ダンを除いて十二部族とする考え方もあります。これはダン族が「自分のために彫像を作った」ため偶像礼拝の罪を犯したとされたからです。黙示録での部族の数え方がこうなっていることは先にもうしあげた通りです。

　他方で「失われた十部族」などと言われることもあります。これは北王国を構成した部族がアッシリヤに滅ぼされたあと、行方知れずになったことを指して言っています。南王国はユダ族、ベニヤミン族、レビ族の3部族ですがこれ以外の10部族のことです。ヨセフはその子のマナセ、エフライムで数えます。新約の時代になってから、紀元70年のローマによるユダヤ人追放、紀元135年のバル・コホバの乱によりユダヤ人は徹底的にカナンの地から追いやられ、流浪の民としてのユダヤ民族が形成されていきます。通常は失われた10部族のように民族としては消滅するのですがユダヤ人については、律法の民として世界中に散らばっても宗教共同体として存続し続けるのです。失われた10部族はどこへ行ったかという問題は昔から多くの議論がなされてきました。アフガニスタンのパシュトン人のなかに自分たちはヨセフ族の末裔と称する部族がある、とかエチオピアに行ったのではないか、とか、はては中国や、日本に渡って来たのではないかという説もあります。日本語のひらかなはヘブル語のアルファベットの変形である、という説まであります。このような説に振り回されるべきではありませんが、あの苦難の歴史の中で消滅せず、今に到るまでその宗教共同体が維持されている、ということにはやはり、「選びの民」としての、神の摂理を感じざるを得ません。現在のイスラエルが行っていることはヨシュアに率いられカナンの地を占領した十二部族が、イスラエル王国を作った歴史をもう一度やろうとしているように見えます。人間の深い罪の結果、この歴史は失敗に終わった歴史です。このような支配と被支配の関係では、人間の罪を贖うことができないため、預言者を通し、新しい救いの道を神様は示したのです。主イエスの再臨の時に初めてユダヤ人がイエス・キリストをイスラエルが望んできた救い主である、と信ずるのかもしれません。ユダヤ人のなかにメシアニック・ジューと称し、主イエスを救い主として認める一団がありますが、彼らこそ終末の時を告げ知らせている人々なのだと思います。祈ります。

（ご在天の父なる御神様、今日はイスラエルの十二部族のことを学びました。子を巡る母親の戦いなど、聖書は人間の様をあからさまに描いています。またこの十二部族の行く末を通し、神の摂理が歴史の中に働いていることを知らしめていただきありがとうございます。今、パレスチナの地は大きな苦難の中にあります。現在の状態が主のお望みの状態ではないことは明らかです。どうか、どうか、主にある平和が齎されるよう切にお祈りいたします。イエス・キリストのみ名により祈ります。）